

ピアノ教本『みんなのオルガン・ピアノの本』の 改訂に関する検討

—新・旧版（第1，2巻）の比較分析を通じて—

森 本 麻 衣 子

（本学非常勤講師）

深 見 友 紀 子

（児童学科教授）

はじめに

『みんなのオルガン・ピアノの本』は1957年に出版されたピアノ教本であり、全4巻で構成されている。日本人によって編纂されたピアノ教材の中で、現在も入手可能なものとしては最も古いものである¹⁾。近年、我が国では様々な種類のピアノ教本が出版されているが、60年近くも親しまれているという点で、この『みんなのオルガン・ピアノの本』は注目に値する存在となっている。

2015年、この教本は『新版 みんなのオルガン・ピアノの本』として改訂された。出版元のヤマハミュージックメディア編集部によると、「（旧版は）生徒によっては補足が必要になり、指導者の力量に任される部分が多かった」こと、「3，4巻の急激な進歩により、他の教本に移行する生徒がいる」こと、「50年以上にわたって内容を変えていないため、楽曲ジャンル（スタイル）にも偏りがあった」ことを改訂の理由として挙げている。また、「学習者が導入期の段階から曲のイメージを持って演奏できるように」という意図をさらに強化したかったという。要するに、ピアノ指導の現状に則した改訂であると考えられる。

近年おこなわれているピアノ教本の研究としては中村（2015）²⁾や田中，村澤（2010）³⁾，徳富，安原（2004）⁴⁾などがあるが、50年以上もの間親しまれてきたにもかかわらず、『みんなのオルガン・ピアノの本』についての研究は未だなされていない。そこで本稿では、この教本の改訂について具体的な教材分析を通して考察する。『みんなのオルガン・ピアノの本』を「旧版」、

『新版 みんなのオルガン・ピアノの本』を「新版」として全体的な比較をおこない、その中でも特にこの教本の前半にあたる第1巻と第2巻について詳細に考察する。そして「新版」が目指すピアノ学習の内容について探ることにする。

1. 全巻を通した旧版と新版との比較

1. 1 分析項目

「掲載楽曲数」「伴奏付きの楽曲数」「歌詞付きの楽曲数」「平均小節数」「調性」「拍子」の6項目について分析した。「掲載楽曲数」は目次に記載されている楽曲をカウントした。「小節数」「拍子」に関しては、拍子が表示されている楽曲（スケールやカデンツの練習などを除く）をカウントした。

1. 2 楽曲数

表1は旧版と新版、それぞれの楽曲数を巻ごとに比較したものである（数字は、旧版—新版の順）。

「掲載楽曲数」に関しては第3，4巻で大幅に削減されていた（それぞれ，69→48，54→44）。これは、新版では音符の表記が大きくなっていることや、小節数の多い楽曲が増えていること、教材の進度をよりスムーズにするために楽曲を厳選したことに要因があると思われる。「伴奏付きの楽曲数」に関しては、新版では第1巻と第2巻において増加がみられた（それぞれ1→17，2→6）。特に第1巻では大幅に増加している。「歌詞付きの楽曲数」は第1巻では増加しているが、第2巻では減少している（15→25，18→16）。

表1 分析結果（楽曲数） 左―旧版 右―新版

	掲載楽曲数	伴奏つきの楽曲数	歌詞つきの楽曲数
第1巻	46-42	1-17	15-25
第2巻	35-33	2-6	18-16
第3巻	69-48	2-1	0-0
第4巻	54-44	2-2	0-0

表2 分析結果（平均小節数） 左―旧版 右―新版

	平均小節数
第1巻	8.9-9.9
第2巻	11.8-11.9
第3巻	14.4-16.7
第4巻	14.6-18.5

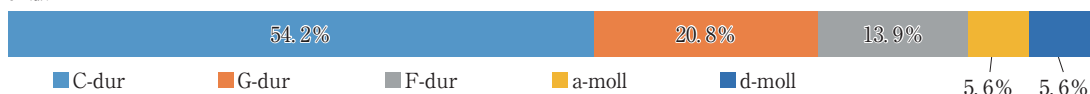
1. 3 平均小節数

表2は「平均小節数」を比較したものである。第1, 2巻に関しては大きな変更はみられないが, 第3, 4巻では増加している。その要因として, 小節数の多い楽曲が新たに加えられていることが挙げられる。また, 第4巻においては24小節の楽曲が大幅に増えたことも影響していると思われる（旧版3%, 新版16%）。

1. 4 調性

「調性」に関しても第1, 2巻においては大きな変更はみられなかった。第3巻は新版においてC-durの割合が減少しており, 調の種類が増えていることが分かる（図1）。また, 第4巻においては日本音階を用いた楽曲が削除されていた（図2）。この点に関して, 「日本音階の曲を外したかったというよりも, 楽曲ジャンルの偏りを是正し, ピアノ曲を増やしたかったという理由が大きい」と編集部は述べており, ピアノ曲の充実を図る意図があったと思われる。

旧版



新版

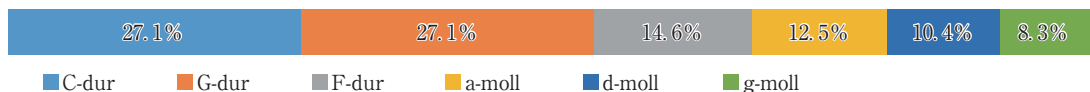
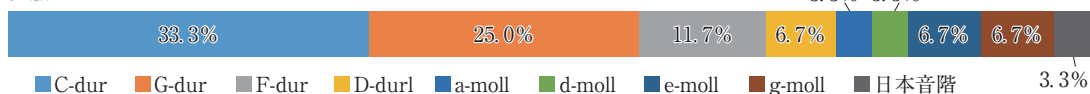


図1 分析結果（調性, 第3巻）

旧版



新版



図2 分析結果（調性, 第4巻）

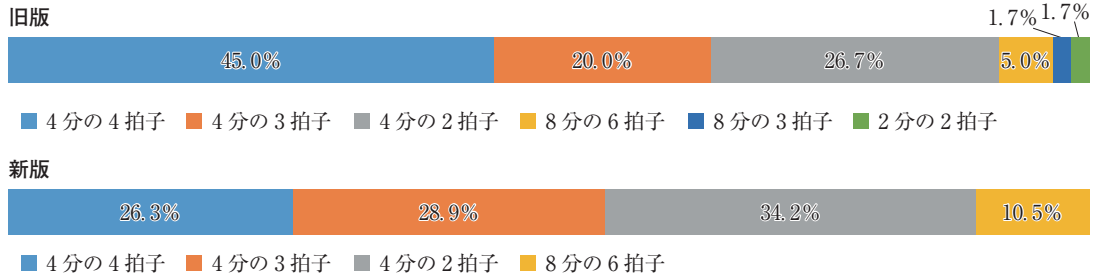


図3 分析結果（拍子，第4巻）

1. 5 拍子

「拍子」に関しては，全巻を通して新版に新たなものは登場しておらず，第1～3巻においてはそれぞれの割合にも大きな変化はみられなかった。しかし，第4巻については，旧版では第4巻に初出していた2分の2拍子が，新版では第3巻に移動している。また，第4巻においては4分の2拍子及び4分の3拍子の楽曲数が4分の4拍子の楽曲数を上回っている（図3）。

2. 第1巻の新・旧比較

2. 1 掲載楽曲

旧版から削除された16曲を表3に示す。

新版ではすべての楽曲に曲名がつけられており，旧版での「れんしゅうきょく」に曲名をつけ，新版で掲載されている9曲（「れんしゅうきょく4」→「あめふり」，「れんしゅうきょく10」→「なみにゆられて」，など）については，削除された楽曲には含めていない。

表3 削除された楽曲（旧・第1巻）

れんしゅうきょく1・下段	れんしゅうきょく9
れんしゅうきょく2・下段	れんしゅうきょく11
れんしゅうきょく3・上段	れんしゅうきょく13
れんしゅうきょく3・下段	れんしゅうきょく15
れんしゅうきょく5	れんしゅうきょく19
れんしゅうきょく6	れんしゅうきょく20
れんしゅうきょく7	ふうりん
れんしゅうきょく8	すずのへいたいさん

曲名つきの楽曲で今回削除された曲は「ふうりん」と「すずのへいたいさん」であるが，「すずのへいたいさん」は新版では第2巻に掲載されているため，実際に削除された楽曲は「ふうりん」のみとなる。この曲は『バイエルピアノ教則本』第9番の冒頭8小節を編曲したものであった。

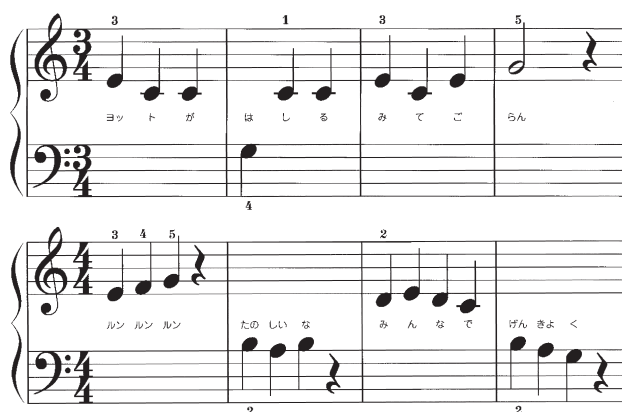
次に，新たに加えられた楽曲は「えんそく」「おんがくかい」「そよかぜ」の3曲である。

まず，「えんそく」は1点ト音を初めて学ぶ楽曲となっている。旧版では，新版において「えんそく」の次の曲にあたる「ヨット」で，1点ト音と3拍子を同時に学ぶようになっていた。

3拍子の楽曲を不得手とする学習者にとって，「ヨット」は跳躍進行が多く，より難易度の高い楽曲である。そのため，「ヨット」に進む前にすべて順次進行（隣接音）で構成されている「えんそく」を加えることで，進度がなだらかになるように調整を図っているのではないかとと思われる（譜例1）。

「おんがくかい」は，1点ハ音に左右の第1指を置いて演奏する，ミドルCのポジションの最終楽曲にあたる。旧版では「たいこ」がその役割を担っているが，新版では「たいこ」と「おんがくかい」の2曲を配置することで学習の定着を図っていると読み取ることができる。

新版では「おんがくかい」の後，Cのポジションで弾く学習へと移行していく。そして，Cのポジションに入って最初に3拍子を経験するのが「そよかぜ」となっている。



譜例 1 上：「ヨット」（新版第1巻，p. 26）下：「えんそく」（同左，p. 24）

2. 2 進度

「そよかぜ」の後に4分の3拍子の楽曲が2曲続き、「たんぽのなかのいっけんや」において初めてFのポジションを経験する。そして、C→F→a→d→Gの順番で、新たなポジションを学んでいく。初めてのポジションを経験する際には五線譜と鍵盤を対応させた図を載せており、視覚的な面で、学習者にポジションに対する意識を促そうとした点が、今回の改訂の大きな特徴である。ポジションの進み方に着目して比較してみると、旧版はC→a→F→d→Gと進んでおり、新版の進み方とは少し異なっていた。

また、旧版ではaからFのポジションに進む間、Fからdのポジションに進む間にもCのポジションの楽曲を2曲ずつ配置しており、やや停滞感を生んでいたと感じられる。新版ではCのポジションの楽曲を途中で挿入することをやめたため、調性に関する学習の進度がより段階的でなめらかになった。

2. 3 到達点

第1巻の最終楽曲（連弾曲を除く）は、旧版が「すずのへいたいさん」、新版が「ちょうちょう」となっている。「ちょうちょう」は旧版において最後から2番目の楽曲であったため、新・旧版の到達点はほぼ同じであるということが出来る。進度においては改訂がみられた1巻だが、最終的な到達点には変化がみられなかつ

た。

到達点は変えずに進度を見直したことで、学習者にとってははずれく要素が減り、取り組みやすい内容となったといえる。

3. 第2巻の新・旧比較

3. 1 掲載楽曲

改訂にあたって削除された楽曲、新たに加えられた楽曲はともに9曲である（表4、表5）。

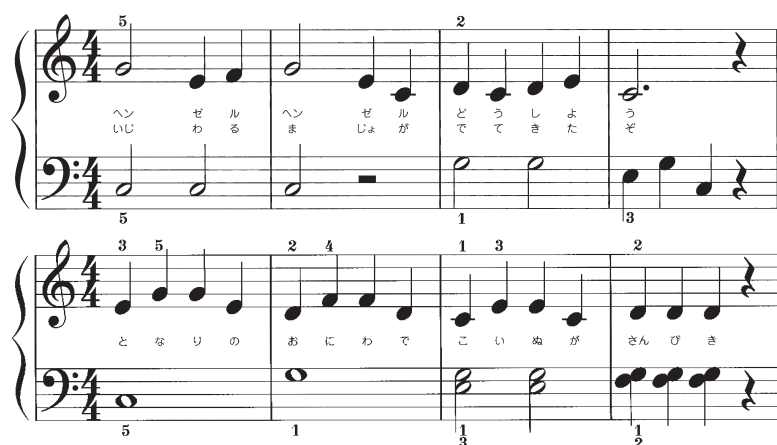
削除された楽曲をみると、第1巻と同じく「れんしゅうきよく」を多く削除していることが分かる。また曲名がついている3曲はいずれも4分の4拍子の楽曲であり、左手がアルベルティ・バスのかたちをとっていることも共通している。

表4 削除された楽曲（旧・第2巻）

れんしゅうきよく21	れんしゅうきよく27
れんしゅうきよく22	れんしゅうきよく28
あかいゆうひ	おやすみ
パパのおたんじょうび	れんしゅうきよく31
れんしゅうきよく25	

表5 加えられた楽曲（新・第2巻）

ヘンゼルとグレーテル	まねっこ
こんにちは	すずのへいたいさん
ああ かわいい	おいかけっこ
パンダのこもりうた	メリーさんのひつじ
かわいいおどり	



譜例2 上:「ヘンゼルとグレーテル」(新版第2巻, p. 4), 下:「こいぬ」(同左, p. 5)

新版に加えられた9曲について具体的にみていく。

「ヘンゼルとグレーテル」は、新版第2巻の最初の楽曲である。旧版では、新版の2曲目にあたる「こいぬ」が最初の曲として掲載されていた。この2曲の違いは左手の伴奏にある。「ヘンゼルとグレーテル」では全体が単音による伴奏になっているが、「こいぬ」は3, 4, 7, 8小節において2音による伴奏が用いられている(譜例2)。新版の第1巻においてもすでに2音による伴奏は経験しているが、新版では第2巻の最初に経験の少ない2音による伴奏曲を配置せず、単音での伴奏曲を1曲入れることによって進度をなだらかにしていると考えられる。

また、旧版では「こいぬ」の後は「おもちゃのへいたい」「ちゃいろのこびん」と続いているが、新版では「ちゃいろのこびん」を先に学習している。曲順を入れ替えることで「こいぬ」で学んだ2音による伴奏を「ちゃいろのこびん」で復習するという流れができたことになる。

次に「こんにちは」は、3, 4, 7, 8小節の左手の伴奏が初出であり、この伴奏形が次の「さよなら」でもみられる。つまり、「さよなら」を弾くための予習として「こんにちは」は加えられたと考えられる。このように、次の楽曲をスムーズに弾けるようになるために加えら

れたと考えられる楽曲は他にもある。「まねっこ」はポリフォニーの曲であり、その後続く「ひとりぼっち」「すずのへいたいさん」「おいかけて」のための導入曲であろう。また「パンダのこもりうた」は、その前の「かえるのうた」で初出したFのポジションの復習であると考えられる。

「ああ かわいい」と「かわいいおどり」は前後の楽曲との関連性は薄い、「むすんでひらいて」で初出し、次の「こうまがはしる」にも登場する8分音符の復習としての役割が大きい楽曲であると考えられる。また、「ああ かわいい」と「かわいいおどり」に共通している、左手の3和音の基本形については、「こねこ」で分散和音、「こうまがはしる」で伴奏形として初出し、「ワルツ」の最後の小節で基本形を弾くという順序で学習する。これは演奏の難易度を考えた配慮であろう。

これらの導入曲を経て、「かえるのうた」ではF-durの和音の基本形を経験する。C-durの基本形は「メリーさんのひつじ」で再び登場するが、この楽曲は復習を兼ねているだけではなく、アルベルティ・バスの初出の曲であり、この後の「かわいいおんがくか」や「つきのひかり」の導入曲という一面も担っているのである。前に出てきた学習項目の復習曲、次の曲に新しく出てくる学習項目のための導入曲を有効的に配置したところに、第2巻の改訂のポイントが

あるといえよう。

3. 2 進度

新・旧版の共通曲であっても曲順が大幅に変更されている。また、削除された楽曲が進度の調整に大きく関わっている。

例えば、アルベルティ・バスの練習曲である「つきのひかり」は、旧版では13曲目であったが、新版では29曲目となり、巻の後半に移動している。旧版ではアルベルティ・バスの練習曲が巻の前半で登場していたため（「あかいゆうひ」(11曲目)、「パパのおたんじょうび」(14曲目)）、難易度が急に上がり、学習者は教本の前半でつまづいてしまうことが少なくなかった。アルベルティ・バスの練習曲の位置を変更することで、進度をなだらかに整えていると考えられる。

また、新版では“アルベルティ・バスの練習”といったように、学習項目ごとに楽曲を配置するという工夫がなされている。旧版においても臨時記号が出てくる楽曲を並べて配置するということはなされていたが、学習項目ごとに進度を設定したところに、今回の改訂の特徴がみられる。

3. 3 到達点

第2巻の最終楽曲は、それぞれ旧版が「かわいいおんがくか」、新版が「いちばんぼし」となっている。

「かわいいおんがくか」はF-durの楽曲であり、シ♭が右手にも左手にも頻繁に出てくる。また、左手の伴奏もアルベルティ・バスや2音による伴奏など、複数の伴奏形が盛り込まれている。つまり、第2巻の中で学んだ内容を総合的に復習できる楽曲であり、難易度の最も高いものが旧版の最終楽曲として位置づけられていたことが分かる。

一方、「いちばんぼし」はスケール・カデンツを応用した楽曲となっている。右手のメロディには初めて指くぐりが、左手には初めて主要3和音がすべて登場する。スケール・カデンツの練習や5指内を超えたメロディも第3巻から本格的に登場するため、「いちばんぼし」は次の第3巻への導入曲として位置づけることができよう（譜例3）。

新版では、旧版の最終楽曲「かわいいおんがくか」が最終曲より2曲前に配置されていることから、新・旧版の到達点はほぼ同じであるといえることができるが、新版では、第2巻は第3巻へ向けた準備として位置づけられ、その結果、

The image shows two musical staves. The top staff is for 'Kawaii Ongaku Ka' (New Edition, Vol. 2, p. 48) in 4/4 time, F major. It features a melody in the right hand and a bass line in the left hand. The bottom staff is for 'Ichiban Boshi' (Same Edition, p. 54) in 4/4 time, F major. It features a melody in the right hand and a bass line in the left hand. The score includes fingerings, dynamics (mf, mp), and articulation marks (accents, staccato).

譜例3 上:「かわいいおんがくか」(新版第2巻, p. 48) 下:「いちばんぼし」(同上, p. 54)

第2巻から第3巻への橋渡しがよりスムーズになったと推察できる。

4. 学習者の表現を促すピアノ学習

「導入期の段階から曲のイメージを持って演奏できるように」という、今回の改訂により編集部が強化したかった意図について、聴覚的な側面及び言語的な側面から具体的に考察していく。

4. 1 聴覚的な側面

聴覚的な側面については、伴奏付きの楽曲を例として挙げることにする。全体の曲数を比べると(表1)、旧版は7曲、新版は26曲で旧版のほうが少ないが、旧版には2009年に出版された指導者用の副教材として全曲伴奏集⁵⁾があるため、ここでは伴奏集も含めて比較、考察をおこなう。

伴奏集では指導者の伴奏がすべて両手による伴奏であるのに対して、新版ではすべて片手による伴奏である。教本自体に伴奏が掲載されている新版では音数の多い伴奏を載せることができないことや、学習者の演奏音域を変えずに、指導者と一台のピアノで一緒に弾くことなどを

想定した結果、新版では片手伴奏になっていると考えられる。

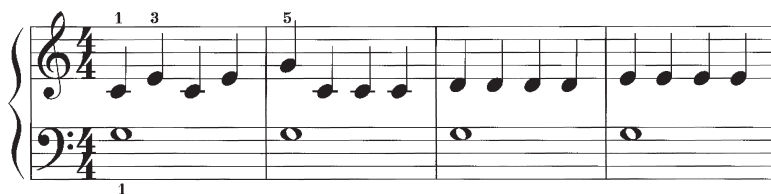
一方で、記載上や指導形態の問題ではなく、学習者の奏でる音楽に対して寄り添うような伴奏を意識していたのではないかと読み取れる。

例えば、第1巻に掲載されている「ピアノのおけいこ」においては（譜例4）、新版での伴奏はオブリガートを所々に盛り込んでいるのみで、ベースを補うことや常にリズムを補助する意図はみられない。

新版ではこの楽曲の1つ前の「こどものマーチ」において、学習者の等速での演奏を促すように指導者の伴奏は常に4分音符で、オルターネーティング・ベースを演奏していた（譜例5）。しかし、「ピアノのおけいこ」においては伴奏の補助がなくとも等速で演奏し、かつ指導者が奏でるオブリガートにも耳を傾け、音の重なりを感じながら演奏することが求められているのである。

同じく第1巻の「おちば」の伴奏譜では、落ち葉がハラハラと舞い散る様子を表すような音型が用いられている（譜例6）。指導者の奏でる音によって学習者の演奏にヒントを与えるこ

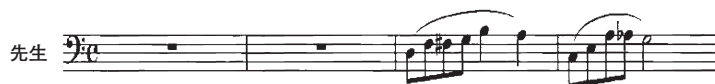
①学習者楽譜（新版第1巻，p.36）



②伴奏集・伴奏（全曲伴奏集1，p.35）



③新版・伴奏（新版第1卷，p.36）



譜例 4 「ピアノのおけいこ」



譜例5 「こどものマーチ」(新版第1巻, p. 35)



譜例6 「おちば」

上：新版・指導者用伴奏譜（新版第1巻, p. 51）下：伴奏集・伴奏（全曲伴奏集1, p. 38）

とができるため、落ち葉のイメージに合った音を自ら選択していくことが可能となるのである。

このように、新版では指導者の伴奏がより学習目的を明確にするもの、あるいは楽曲のイメージに沿ったものに変更されていることが分かった。指導者の伴奏の第一の役割は、学習者

が聴覚的な側面から楽曲のイメージをつかみ、自身の演奏に反映できるようにするための支えであると考えられる。学習者が伴奏を聴くことで様々なことを感じ、自身の表現へと活かしていくことができるよう導くことが指導者に求められるだろう。

4. 2 言語的な側面

本来、速度記号、強弱記号などの音楽記号の学習においては、どのように演奏しようかと考えることから始め、その後に記載されている記号を覚え、生きた知識として身につけて演奏に反映していくことが重要である。しかし実際は、テンポ表示のとおりには弾かなければならない、音符に「スタッカート」がついているから音を切って弾かなければならないというように、学習者は無自覚のまま強制されがちである。

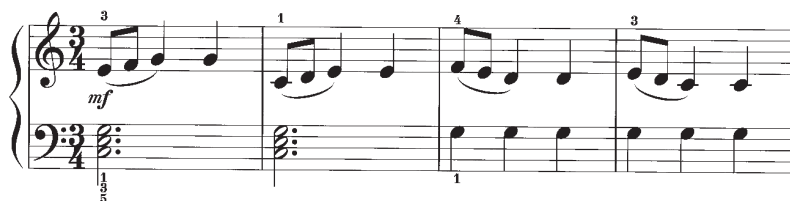
新版ではこの傾向を是正すべく、数字によるテンポ表記から言葉による表記（“さみしげに” “いきいきと”）に変更した。言語による指示を先行させることによって、演奏表現と音楽記号が学習者の経験の中で結びつくための工夫がなされたのである。

例えば、第2巻に掲載されている「ああ かわいい」には“かるやかに”という指示が書かれている。この楽曲は3拍子のダンスの曲であるため、1拍目を重たく、2拍目と3拍目を軽く弾くことが求められる（譜例7）。しかし、学習者によっては3拍目と次の小節の1拍目をつなげて弾いてしまうことが多々あるため、3

拍目の表現を学習者に伝えるために、“かるやかに”という全体のイメージを提示していると捉えることができるだろう。この楽曲を学習する時点ではまだ「スタッカート」という記号は出てきていないため、なおさら言葉による指示が重要となるはずである。

また、強弱の表現においても、言葉による指示は重要な役割を果たす。

例えば、「メリーさんのひつじ」と「かわいいおんがくか」の出だしはどちらも mf から始まっているが、言葉による指示は異なっており、前者は“げんきに”、後者は“いきいきと”という表記になっている。mf は“少し強く”を意味する強弱記号であるが、mf の表現方法は1つではない。「メリーさんのひつじ」や「かわいいおんがくか」の曲名に対しては、“少し強く”以外に、“暖かく”、“かわいく”などの言葉が連想できるだろう。曲想に合わせてどのような mf で表現するとよいのか、学習者一人ひとりが考え、あるいは指導者と学習者が常に対話することによって、表現力は高まり、より深く音楽を学ぶことにつながるはずである。



譜例7 「ああ かわいい」(新版第2巻, p. 34)

まとめ

本稿では『みんなのオルガン・ピアノの本』の旧版と新版を比較し、改訂のポイントについて具体的な教材分析を通して考察をおこなってきた。第1巻、第2巻はともに到達点を変えることなく、進度が一部変更されていた。曲数を削減したこと、曲順を入れ替えたことが進度の調整に大きく関係していることが読み取れた。特に新しく加えられた楽曲はそれぞれの役割がはっきりしており、指導する側にとって楽曲ご

との学習目的が明確になったといえるだろう。

学習者が言語的、聴覚的な情報から楽曲ごとのイメージを捉えることができるような工夫を盛り込んだことも意義深い。新版では、導入期であっても学習者が楽曲のイメージを持ち、自身の表現を重視するための工夫がみられた。新版の伴奏譜は、学習者が楽曲を表現豊かに演奏できるよう、ヒントを与える役割がより大きくなっていった。

また、指示が速度記号から言語による指示に

変更されたことにより、それぞれの楽曲をどのように演奏しようかと学習者が自ら感じ、考えることが容易になったと思われる。さらには、音楽記号の意味をそのまま丸覚えするのではなく、音楽記号と演奏表現が学習者の経験の中で結びつくための配慮もなされていた。

以上、第1巻、第2巻の新・旧版を比較しながら、ピアノ教本『みんなのオルガン・ピアノの本』の改訂について検討した。次回は第3巻、第4巻について分析、考察をおこなう予定である。

謝辞

本稿の執筆にあたり『みんなのオルガン・ピアノの本』の発売元である、株式会社ヤマハミュージックメディアには資料を提供して頂いた。厚くお礼を申し上げたい。

注

- 1) 音楽之友社編『もっと知りたいピアノ教本』（音楽之友社、2000）
- 2) 中村礼香「ピアノ初心者のレッスンにおける教則本の比較」『鹿児島女子短期大学紀要』第50巻（鹿児島女子短期大学、2015）pp.77～88
- 3) 田中巳穂、村澤由利子「バスティン・ピアノメソードに見られるラーニング・スパイラルに関する一考察」『鳴門教育大学実技教育研究』第20巻（鳴門教育大学、2010）pp.11～18
- 4) 徳富聖子、安原雅之「ピアノ教則本の比較研究にむけて」『教育実践総合センター研究紀要』第18巻（山口大学、2004）pp.75～86
- 5) 浅野義弘、ヤマハ音楽振興会編著『みんなのオルガン・ピアノの本1 全曲伴奏集』（ヤマハミュージックメディア、2009）
浅野義弘、ヤマハ音楽振興会編著『みんなのオルガン・ピアノの本2 全曲伴奏集』（ヤマハミュージックメディア、2009）